ISSN 1345-3580

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.5 May 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

5

CONTENTS

・巻頭言
神殿をさらに見学する
／井上　昭洋 ..... 1

・天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」（11）
本連載における「翻訳」について ⑩
／加藤　匡人 ..... 2

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（19）
戦後の統治者の交代と社会混乱
／山西　弘朗 ..... 3

・社会福祉からみる現代社会 ―天理教の社会福祉活動に向けて―（14）
子育て支援における天理教の社会福祉活動（2）
／深谷　弘和 ..... 4

・イスラームから見た世界（28）
イスラームの人間観 ②
／澤井　真 ..... 5

・コロンビアへの扉―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（33）
7. コロンビアの非日常 2 その 1
バカンスとその時期について
／清水　直太郎 ..... 6

・天理参考館から（35）
麻疹をあなどるなかれ
／幡鎌　真理 ..... 7

・2024 年度公開教学講座のご案内／新刊紹介 ..... 8

巻頭言

## 神殿をさらに見学する

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

前号では、天理大学のフィールドワーク方法論の授業での神殿見学の実習について紹介した。人は知識や経験、立場が異なれば、同じものを見ていても同じように見えていない。信者の学生と未信者の学生とでは、見学レポートの内容に違いが出てくるのもそのためだ。信者の学生で神殿が二階建ての建物であると記す者が皆無なのは、参拝をする場所が一階であるという無意識の思い込みがあるからだろう。もしくは、トイレや下駄箱のある階下を高床式建物の床下と捉え、礼拝場を一階とみなしているからかもしれない。いずれにせよ、神殿は信者には高床式？の一階建て、未信者には二階建てに見えるわけである。

神殿見学の実習で、信者・未信者を問わずほとんどの学生が指摘するのが、回廊の両側にずっと連なって見える白いハート型の模様である。回廊の梁と柱の接合部の補強を兼ねた装飾板にハート型に彫られ白く塗られた模様が施されており、それが回廊の先までずっと続いて見える。これを学生たちは「廊下の両側に白いハートマークが並んで見える」と記すわけである。信者であろうとなかろうと、神社建築や日本古来の文様に詳しくなければ、それはただのハート型の模様であって「猪目（いのめ）」ではない。「猪目」とは、神社仏閣で火伏の魔除けとして建物の様々な箇所に付けられるハート型の文様のことである。近頃は寺社がそれを売りにして、テレビ番組や SNS で話題になることもあるようだ。

神殿と教祖殿の屋根の色が異なることを指摘する学生はいても、「千木（ちぎ）」の形状が異なることまで指摘する学生はいない。「千木」とは社殿の屋根の先端に交差して突き出ている角のような部分のことである。神殿や教祖殿は神社の社殿と異なり瓦葺きなので、鬼瓦に梅鉢、千木、鰹木のデザインが施されている。その千木の形が神殿と教祖殿では異なっているのだ。神殿の千木はその先端を垂直に削っている「外削（そとそ）ぎ」であり、教祖殿のそれは水平に削っている「内削（うちそ）ぎ」になっている。外削ぎは男千木、内削ぎは女千木と呼ばれることもあるが、それは前者が男神を祀った社殿に、後者は女神を祀った社殿に用いられるとされるからだ。しかし、必ずしも祭神の性別によって千木の種類が決まるわけではないようで、一つの説にすぎない。

参与観察においては、当たり前に見えるものを見たままに記録することが求められるが、コツを掴めば注意を払うべきポイントに注力できるようになる。神社建築の知識がなくても、見たままを愚直に書き留める癖がついていれば、神殿と教祖殿の屋根の色の違いに気づけば、続いて「他に違う箇所はないか？」と目を凝らし、屋根の上の角のような部分の形状が異なることに気づくはずだ。そうして「神殿と教祖殿とでは鬼瓦の角の部分の形が異なる」と記すことができれば、レポートの得点も高くなる。また、実際の調査であれば、関係者に「なぜ違うのですか？」と尋ねれば、その理由を説明してもらえるだろう。フィールドワークは、見たままを書き留めた事柄から生まれる素朴な疑問を起点としてスタートするのである。

さて、未信者の神殿見学者でも神社建築について知識のある人であれば、神殿、教祖殿の鬼瓦のデザインに目をやって、男千木・女千木の説に基づき「天理教の神様は男神ですか？」、「教祖は女性ですか？」と尋ねてくることがあるかもしれない。後者の質問に答えを窮する信者はいるはずもないが、前者の質問に対しては、どのように答えれば良いだろう。男千木・女千木の解釈は俗説であると退けたところで、男神か否か？という質問は残る。未信の人にも分かりやすく説明できるようにしておきたい。

# 本連載における「翻訳」について⑩

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
加藤　匡人　*Masato Kato*

前回（３月号）では、前々回に引き続きタラル・アサドの「翻訳」に関する知見を紹介した。そこでは、イスラームの伝統における聖典の言語や儀礼のあり方を事例に挙げながら、翻訳の対象となる崇拝の行為の意味を理解するには自己の涵養が必要であるが、それはある言説的伝統の中で培われるものであり、それは必然的に他者を必要とし、身体の感覚を通して可能になるものであると論じられていることを紹介した。

ここからアサドは、イスラームにおける翻訳不可能性について、それは決して聖典の意味内容に無関心であったり、アラビア語以外の言語の価値を認めないというわけではなく、むしろそれが意味するのは、「テキストの抽象化された知的な意味が、読解的／詠唱的／宗教的な自己とテキストとの関係を変容させてしまうではないかという懸念」（アサド　2018＝2021：112）であると論じる。その前提となるのは、前回にも触れた、言語のメッセージをその媒体から切り離すことはできないという認識であり、その視点から、「媒体がどのように主体に宿るようになり、どのように主体と結びつくかが、メッセージの意味にとって決定的である」（同上）と論じている。

この点を掘り下げるために、アサドは伝統における「儀礼」や「儀礼化」という概念に注目する。そのねらいは、「行為主体が特定の行為によって、いかにして適切な感情と思考を形成するのか、そして、その行為が、いかにして自己の形成における契機と見なされ得るか、という問題に焦点を当てる」ためである（同上：113）。

その儀礼として取り上げられるのは、「祈祷」（筆者注：原語は “prayers” ＝「祈り」）である。アサドはイスラームにおける祈祷の意味の語られ方を概観した上で、儀礼的な祈祷の場面において発声されるクルアーンの詩句が翻訳不可能なのは、行為者の意志や意図が主観的なもので、それにアクセスするのが不可能であるからではなく、むしろその意図自体が儀礼的な祈祷にとって本質的なものであり、その行為を通して行為者が礼拝に適切な意図を学ぶからである、と論じている（同上：120–123）。そして、イスラームの伝統における様々な慣習を例に挙げながら、それらも崇拝行為の一部であると前置きした上で、「その目的は、繰り返しによって、神に対する適切な態度、すなわち適切な意図、思考、感情を統合した関係を涵養することである」（同上：122）と述べている。

このようにアサドは、言説的伝統における祈祷の儀礼においては、祈祷をするという意図が先行し、その結果として行為が発生するのではなく、むしろ祈祷という行為をすることによって、またそのプロセスを通して、祈祷に対しての適切な態度が育てられていく、と論じているのである。

そしてアサドは、「翻訳と感覚ある身体」の章の終わりで、「主体がどのように言語を用いるかということだけでなく、言語が主体をどのように用いるかを見るべきなのである」（同上：139）とこれまでの主要な論点を繰り返した上で、クルアーンの翻訳について以下のように述べている。

> クルアーンの構想を感覚ある身体に翻訳すること（特に儀礼的な祈祷で発声すること）は、クルアーンの言語によって可能になっていると同時に、クルアーンの中心的な徳を教えようとする補足的な言説によって可能になっている。そして、ここでのクルアーンの言語の主要な目的は、コミュニケートすることだけではなく、――親族、友人、教師の助けを借りて――ある過程を形成すること（筆者注：原文は “to model a process” ＝「ある過程を具現化すること」）であり、そこではコミュニケーションはもちろん一つの要素ではあるが、それだけを「抽象化」することはできない。（同上：138–139、強調点は引用者）

このように、アサドにとってクルアーンの言語を翻訳するとは、その抽象化された意味を認知的なレベルで理解することではなく、儀礼的な祈祷の場面などで、その聖典の構想がいかに身体に翻訳されるのかを意味するのである。以前にも少し触れたが、アサドは自身が宗教と同義と捉える「言説的伝統」という用語についても、「意味の定義に焦点を置くのではなく、ある重要な意味において、魂の鍛錬の過程で教えられ規律訓練される行動の慣習と感性に焦点を当てている」（同上：136）とあらためて述べており、テキストそのものの翻訳を超えた翻訳の捉え方を提起しているのである。

このような「翻訳」の理解の仕方は、多くの読者にとっては直感的な理解からかけ離れたものに聞こえるかもしれない。しかし一方で、これを天理教の実践にあてはめて考えてみるとイメージがしやすくなるかもしれない。たとえば、天理教にとって最も重要とされる「つとめ」を例にとってみると、その地歌である「みかぐらうた」に書かれた言葉の抽象的な意味を抽出しようとするのが一般的な翻訳の捉え方だとすれば、アサドの語る翻訳とは、実際にその地歌を歌いながらおつとめを勤めることで、親神に向き合う信仰者としての主体が身体レベルでどのように形成されるのか、に主眼があると言えるだろう。

さて、これまで 10 回にわたり、本連載における「翻訳」について様々な角度から論じてきた。その最初の回（第２回、2022 年 11 月号）でも述べたが、そのねらいは「翻訳とは何か」そのものを論じることではなく、「翻訳」という言葉を分析のツールとして使うことで、これまで異文化伝道研究においてあまり注目を浴びてこなかった地域の取り組みを浮き彫りにすることにある。次回からは、本連載の主題である、フランスを中心とするヨーロッパでの伝道の取り組みについて、これまで考えてきた「翻訳」という視点から眺めていきたい。

［引用文献］

タラル・アサド（苅田真司訳）『リベラル国家と宗教―世俗主義と翻訳について』人文書院、2021 年。

Asad, Talal. *Secular Translations. Nation-State, Modern Self, and Calculative Reason*. New York: Columbia University Press, 2018.

# 戦後の統治者の交代と社会混乱

香川大学大学教育基盤センター
非常勤講師
山西　弘朗 *Hiroaki Yamanishi*

1945（昭和20）年、日本が連合国によるポツダム宣言を受諾し、長く続いた第二次世界大戦が終わった。この戦争により多くの尊い人命が失われたが、また、それまでに獲得した植民地を失うこととなった。

1895（明治28）年に日清戦争の講和条約である下関条約によって初めて植民地となった台湾も、ようやく50年にわたる日本統治が終焉を迎えることとなった。

日本に代わって台湾を統治することになった中華民国は、国民政府主席の蒋介石が陳儀を台湾省行政長官に任命し、重慶において台湾省行政長官公署および台湾警備総部を設置した。この時、陳儀が台湾警備司令も兼務することになった。中華民国は台湾を接収することとなり、接収要員が台湾へ渡った。この国民政府による接収について台湾人研究者である黄智慧は「敗戦国日本に対し、中国側は賠償を要求しなかったが、日本の台湾総督府以下、公私有財産をもって賠償に充てることにした」という見方を示し、その根拠として台湾省警備総司令部が1945年10月に、設置後初めて発した通告の第1号に「日本人の公私有財産の移動、転売、処分を禁止する」という条文があったことを指摘している（黄、299頁）。

そして、同年10月25日には、台湾の降伏式典が台北公会堂で行われ、日本側は台湾総督安藤利吉が、中華民国側は陳儀がそれぞれ全権として出席し降伏文書に署名、台湾省行政長官公署が正式に台湾統治に着手することになった。公署は旧台北市役所（現在の行政院）に設置された。なお、台湾帰属については、日本が1951（昭和26）年のサンフランシスコ講和条約によって台湾における権利、権限及び請求権を放棄し、施政権を喪失したものの、台湾の主権の帰属について未定であるとする「台湾地位未定論」と称される主張もある。

さて、日本から中華民国への統治者の交代の時期から、台湾の社会秩序が乱れ始め、50年にわたる日本人による支配の終結による反動で、日本人に財物を強要したり、公然と日本人に暴行を加えるなど、日本人であること自体が危うい状況になった（黄、同上）。

当時の社会の混乱について、台湾の著名な歴史学者で台湾省文献委員会の主任委員も務めた林衡道は、台北市内で日本人やその協力者と目された保正（警察官の補助を行う自治会長のような役目）が街中で罵声を浴びせられたり、殴られたりする光景を目撃したと語っている。さらに、単なる民衆による暴動であれば、一斉に起こるとは考えにくいため、このようにまとまって蜂起し日本人を暴行するという事件の背景には、単純な動きではなく組織的な関与が疑われ、裏で糸を引く指導的な立場の人物がいたのではないかという見方を示している（林、73頁）。

終戦当時、台湾には天理教の教会が39カ所あった。これらの教会の土地と建物は、教会長がすべて日本人であったため、それらは多くの台湾人信者のお供えによるものであったにもかかわらず、日本人の財産とされ、接収の対象とされてしまった。さらに、引き続き台湾での生活を望む日本人が多かったものの、全員日本への送還、つまり引き揚げが確実になったことから、その後の台湾における天理教が存亡の危機を迎えることとなった。

台湾伝道庁は、全教会に引き揚げの通知を出した。そして、教会の土地、建物が接収されたため、各教会の参拝の対象であった「やしろ」や、その中に収められている「目標（めど）」の多くは、各教会や伝道庁で処分されたり、焼却して昇天を願うという対応が取られた。

これは、日本人引き揚げ者が携帯できる荷物がリュック2つに入る身の回りのものという厳しい制限があったことが大きな理由である。また引き揚げの際に、乱雑な取り扱いがされるおそれもあったためである。

多くの台湾信者を持つ嘉義東門教会では、会長後継者が対応策として、台湾の民間信仰の寺廟のように「やしろ」の前に木彫りの神像（「天公」と称される玉皇上帝、「太陽公」と称される太陽星君、「太陰媽」と称される太陰星君）を買ってきて並べることにした。さらに台湾人布教所長たちは田舎の寺から観音菩薩や釈迦如来の分身である神像を借りてきて、教会に持ち寄った。また、神像の前に香炉を置き、線香を差した（黄、299～300頁）。しかし結局のところ、このようなカムフラージュをしたとしても、教会の土地と建物が日本人の財産とされることは免れなかった。そこで、現地の地方政府に公務員として勤務していた布教所長の一人が教会の留守を預かることとなり、接収された教会の土地と建物が競売に掛けられるという情報を事前に入手し、運よく買い戻すことができたため、戦後も教会建物と「やしろ」を残した唯一の教会となった（現会長への筆者の聞き取り調査による）。ちなみに、この教会の建物は2021年に、嘉義市政府によって文化資産保存法（文化遺産保護法）に基づく「古蹟（史跡）」として登録された。

これとは対照的な状況に陥ったのが、同じく多くの台湾人信者を持つ斗六教会であった。斗六教会では、現地の言語や文化に精通した、台湾生まれの会長後継者を戦死によって失ってしまった。会長後継者の妻子や年老いた父親は、台湾に住み続けることを希望していたが、政府の命令により引き揚げを余儀なくされることになり、着の身着のまま何とか引き揚げるという状況で、以後の対応策や教会をどのように運営していくかをきちんと話し合う余裕がなかった。

さらに、戦後は斗六教会が日本人の財産として接収され、別の用途に供されただけでなく、所属する布教所は、日本的色彩の強い宗教施設として現地の警察の監視下に置かれた。そして布教師たちは短くて3日、長い者は1カ月もの期間、警察に拘留され、日本人や日本との関係について厳しく取り調べられ、天理教の布教所を存続させることができない状況となった（山西、80～81頁）。

このように戦後の天理教を取り巻く状況について、嘉義東門教会は宗教的迫害がほとんどなかったとされるが、斗六教会は厳しい迫害を受けており、地域によって大きく異なっていたことが、その後の状況に影響を与えることとなった。

［参考文献］

黄智慧（1989）「天理教の台湾における伝道と受容」『民族学研究』54（3）292～309頁。
山西弘朗（2011）『天理教在台湾的信仰形態之変遷：一個宗教人類学的考察』台北：国立政治大学民族学研究科修士論文。
林衡道（1992）『林衡道先生訪問記録』台北：中央研究院近代史研究所。

# 子育て支援における天理教の社会福祉活動（２）

天理大学人文学部准教授
深谷　弘和 *Hirokazu Fukaya*

前回は、日本の子育て支援をめぐる現状について整理した。2022年に養徳社から新田恒夫・杉江健二著『子どものおたすけ』が発刊されている。同書では、発達障害の理解や、児童虐待の実態などが整理されると共に、近年、天理教内で広がりをみせている「イライラしない子育て講座」についても詳しく紹介されている。今回は、その内容を紹介し、子育て支援における天理教の社会福祉活動の可能性について整理する。

## 少年会活動と子育て支援

これまで天理教の各地の教会では、地域の子どもを集めて、子ども会などがおこなわれてきた。こうした教会活動のほか、農業の繁忙期に子どもを預かる季節託児所、戦後に広がる里親活動もまた、子育て支援に位置づけることができる。毎年、開催されるこどもおぢばがえりは、多くの子どもや、子育てをする親が天理教の教会を知るきっかけとなり、教会お泊まり会や、鼓笛活動などへとつながっていく場合もある。核家族化がすすみ、子育ての孤立化がすすむ現代社会においては、教会の少年会活動を通じて、子育てを終えた世代が支援を提供し、子育て中の親が悩みを相談したりすることにもなる。そのため、少年会活動を運営する側が、地域社会の子育ての問題に関心を持ち、教会にやってくる親子が、どのような課題を抱える可能性があるのかを知っておくことが求められる。実際に、地域の小中学校のPTAの役員を担ったり、行政の子育て支援に携わっている教会長も多く、地域社会から子育て支援の社会資源の一つとして捉えられている教会も多くある。教会長自身のそれまでの経歴を活かして、学習塾を開いたり、書道、雅楽、ダンスなどを教える機会を設け、子育て世帯とのつながりをもつ教会もある。少年会活動をはじめ、教会を広く、地域社会に開くことが、孤立する子育て世帯への支援につながるといえる。

## イライラしない子育て講座

教会がもつ子育て支援の役割に期待して作成されたのが「イライラしない子育て講座」である。この講座は、天理教美張分教会長の杉江健二氏によって2017年に開発された。杉江氏は、教会長として、長年、里親活動や不登校、ひきこもりの支援に携わっており、一般社団法人青少年養育支援センター陽氣会を設立、現在では、全国各地で同講座を開催している。核家族化が進み、子育てについて相談したり、学ぶ機会が少なくなっている現状の中で、「子育てを学ぶ時代」がはじまっているとし、子育てにあたってのコツや、向き合い方を伝える内容となっている。「イライラしない子育て講座」は、杉江氏が、教会近隣に暮らす子育て世帯との接点をつくり、CPA（Communicative Parenting Approach）を学ぶ内容として開発。その後、天理教里親連盟が、CPAを里親養育にも活用したいという要望から、天理教の信仰要素を取り入れた天理教ファミリー・コミュニケーション・アプローチ（TFA）が開発される。CPAは天理教の教えを知らない一般向け、TFAは信仰者向けという位置づけである。現在、TFAは修養科でも取り入れられ、子育てを通じて教えを学ぶプログラムにもなっている。

「イライラしない子育て講座」は、子育てで生じる親と子のコミュニケーションのずれを修正する内容となっている。例えば、親が子どもに対して、「ちゃんとしなさい」と声をかけたとしても、子どもには「ちゃんと」の意味が伝わっていないため、具体的に伝わりやすい指示を出す方法が示される。また、子どもとコミュニケーションをとる際には、目線を合わせ、壁を背にするなどして、子どもが集中して話を聞くことができるように環境を整えるなどの工夫が示されている。子どもからみて、大人がどのように見えているのかをわかりやすく伝えることで、「子どもが言うことを聞かない」のではなく、「大人の伝え方の工夫が必要」ということが明らかにされている。さらには、子どもの話を受容的に聞く方法や、子どもの行動を褒める方法などが示される。これら「イライラしない子育て講座」に共通するのは、親と子が、噛み合ったコミュニケーションをとるための方法が示されていることである。

## 信仰的な気づき

『子どものおたすけ』では、「イライラしない子育て講座」の開発者である杉江氏のさまざまな信仰的な気づきが紹介されている。杉江氏は、長年、里親として活動する中で、里子に懸命に寄り添っても、里子の数や、児童虐待の数は減らないことに気づいた。そこで、その根本となる子育て支援に着手するようになる。近年では、児童虐待につながる不適切な養育を「マルトリートメント」と表現するが、そうしたことを学ぶ中で、杉江氏自身が、親が子どもの意見を聞かずに、一方的に親の意見を子どもに押し付けるコミュニケーションをとっていたことが反省的に語られている。特に、天理教においては、教会長と信者の関係を「親子」に例えることも多い中で、子育て支援を学ぶことは、教会長としての自らのあり方を問い直すことになると述べられている。

また、杉江氏の長男が不登校になった経験から、自らが「児童福祉の専門家」になっていたことへの反省的な気づきが示されている。不登校やひきこもりの相談を受ける中で、「少しでも早く結果を出すこと、効果的な解決法を探ることを急ぐあまり、不登校・ひきこもり問題の知識や表面的な対処法の指導にばかり走ってしまい、その問題の背景にある、その当事者である子どもと親との関係性や親の通り方、その節（ふし）に込められた親神様の思いやその生かし方など、もっと深いところにある大切な部分に入っていくことがおざなりになっていました」（p.282）と述べられている。杉江氏自身が、不登校の親となることによって、これまで以上に、不登校の親に共感して、話を聴くことができるようになり、正しい方法を提示する専門家ではなく、共に親神様の思いを探る存在となったとする。

先述したように「イライラしない子育て講座」には、親と子のコミュニケーションを見つめなおす「きっかけ」が示されている。なぜ、自分たちが親子になったのか、家族として暮らすのか。その神意を探るための入り口に立つためのコツが「イライラしない子育て講座」と言えるだろう。

同書では、最後に教会の子育て支援の可能性についても述べられている。子どもの問題が幅広く、多様になる中で、おたすけに携わる者同士が、知識や経験を共有する場の必要性があるとして、杉江氏らによって2021年にTON × TON（天理教オンラインネットワーク＆天理教おたすけネットワーク）が設立されている。こうしたネットワークが、さらに地域の孤立した子育て世帯を救う手立てとなることを期待したい。

# イスラームの人間観②

天理大学人文学部准教授
澤井　真 *Makoto Sawai*

## イスラーム研究では「人間」をどう扱ってきたか

近年、中東イスラーム研究では、特にジェンダーからみたイスラームについての研究が目覚ましく進んでいる。とりわけ、長沢栄治東京大学名誉教授を代表とする「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」（略称：IG科研）では、頻繁に研究集会を開催し、研究成果を出版してきた。明石書店から出版されている「イスラーム・ジェンダー・スタディーズ」シリーズは、女性という問題だけではなく、教育、家族、結婚、そして労働など多様な視点からイスラームを描いている。

このシリーズが読者に投げかけていることがある。それは当たり前のことのようであるが、私たち一人ひとりの生き方は異なっているということだ。「イスラーム」と一言で言っても、内実は多種多様であり、価値観も考え方も異なる。言い換えれば、一人として同じムスリムはいないということだ。また、人々が出会う場面では、価値観や考え方の違いが浮き彫りになる。マジョリティ側から見ていると、ともすれば見落とされてしまう事柄は多くある。社会的に弱い立場にある女性や子ども、そして労働者が自らの生き方を模索している様子を観察することで、イスラーム研究の新たな地平が現れていると言える。

## クルアーンから男と女を読み解く

イスラームは、家父長制や部族制など男性が強いイメージで理解されることが多い。それは、預言者ムハンマドや神・アッラーが強い男性像で捉えられてきたことも、大いに関係しているだろう。また、イスラーム思想史においては、「学者」（ウラマー）は男性によって占有されてきた。そのため、イスラーム研究者がイスラームの人間観を探ろうとすると、どうしても視座が男性からの目線に偏ってしまう。

それに対して、イスラームの聖典クルアーンには、クルアーンそれ自体がもつ「世界観」（Weltanschauung）があると指摘した研究者がいる。それは、日本ばかりではなく世界のクルアーン研究を牽引してきた井筒俊彦である。今日、クルアーンは一つの書物になっている。あたかも一人の人物の世界観を探るごとく、クルアーンそれ自体のもつ世界観を明らかにすることを指摘したことは、非常に画期的であった。もちろん、クルアーンは神の啓示であり、預言者ムハンマドを介して伝えられたものであるが、テクストをどのように読み解いていくかという点において、井筒のクルアーン研究はムスリムにも大きな影響を与えている。

クルアーンに対するこうしたアプローチに強い影響を受けたのが、アミーナ・ワドゥードである。彼女自身はムスリマ（ムスリムの女性形）であり、イスラームのジェンダー研究の第一人者である。彼女が著した『クルアーンと女性』（Qur'an and Women）は、これまで男性の視点から解釈されてきたクルアーンを、女性の視点から読み直す試みであった。歴史的に、法学者をはじめとする学者（ウラマー）は男性によって占められており、女性は学問体系を学ぶ機会も学者としての立場に就くことも基本的にはなかった。むしろ、大学などの高等教育の成立のなかで、ようやく学ぶ機会を得ることができたと言える。このことを言い換えるならば、従来のクルアーン解釈はその解釈も男性目線であり、女性目線でのクルアーン解釈はほとんどない状況にある。

アミーナ・ワドゥード
女性のイマーム（指導者）として世界的に知られている
https://arabic.georgetown.edu/meet-the-scholar-amina-wadud/

クルアーンを見渡すと、神の人間創造において、「男」（r-j-lの語根からなるrijāl、rajulの複数形）と「女」（n-s-wの語根から成るnisāʾ）が創造されたとある。つまり、神が創造した人間は男と女から成る。しかしながら、両者の関係性については平等なのか優劣があるのかをめぐって、クルアーン解釈という点で議論がなされてきた。

## 男女はどのようにして創造されたか

前回（2024年1月号）でも取り上げた「神は一つの魂（nafs）からあなた方を創り、またその魂から配偶者（zawja-hā）を創り、両人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる」という一節において、ワドゥードは、「一つの魂」（nafs）という語に注目する。この語は、「自我」とも翻訳されたりするが、全人類の共通の起源を指す語としてクルアーンでは登場することを指摘する。また、「魂」というのは男性形でも女性形でもない―言い換えれば男性形でも女性形でも用いられる―特殊な語である。それゆえに、男女双方の本質的要素を構成する。クルアーンのなかで、神はこうした性別のない語を人間の起源としたことを理由に、ワドゥードは男女の平等性を論じている。

さらに、一つの魂から創造された「配偶者」（zawj）という語についても話を進める。ワドゥードは、井筒の方法に依拠しながら、「あらゆるものを両性（zawjayn、つまり配偶者をもつもの）に創造した」（51章49節）とクルアーンの一節を引用する。ここで「両性」と翻訳した“zawj”は、文法的には双数形であるだけではなく、ペアの片方という意味がある。その結果、一つの魂から創造された人間は、生まれた後に自らの配偶者をもつことになるという理解を導くことができる。ここには、男性が上で女性が下という考えは登場しない。ワドゥードは、男性が読んでも女性が読んでも、等しく神の下において平等な人間が存在するだけとしか理解できないと主張する。

クルアーンを通して、現実世界を変えていこうとする女性たちは、男女の関係性というだけではなく、人間という視点から今ある社会を眺めているのである。

［参考文献］

Amina Wadud, *Qur'an and Woman: Rereading the Sacred Text from a Woman's Perspective*, Oxford: Oxford University Press, 1999.
後藤絵美「クルアーンとジェンダー―男女のありかたと役割を中心に」松山洋平編『クルアーン入門』作品社、2018年、389～413頁。

# 7．コロンビアの非日常２その１　バカンスとその時期について

元天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎 *Naotaro Shimizu*

私の空手道場（コロンビア）の生徒に一人のパイロットがいる。ドイツのある航空会社勤務で、現在はパイロットの指導もしているベテランの50代の男性だ。彼は６月と12月もしくは１月にバカンスを必ず取る。長い時は１カ月も海外で過ごす。もちろん家族も一緒である。空手道は８年間も続け、黒帯を取り、現在は指導員として、道場生に稽古をつけている。しかし、お国柄というかラテンアメリカの「家族ファースト」の風潮も手伝って、彼にとってバカンスは人生において欠かせない要素であって、従ってバカンスの間は、仕事や空手道場のことも一切関わり合いを持たない。これは指導員の彼のみならず、生徒も同じである。

私たち日本人は「休みだから」と、平気で仕事仲間や上司や部下に連絡を取るが、コロンビア（ラテン）世界ではそういうことは「緊急」の場合を除き、無い。聖と俗ではないけれども、仕事とバカンスはきっちりと一線を引いているのだ。

コロンビアでは、バカンスというと富裕層は海外に、またその他の社会階層の人たちはそれなりに「旅」をする。時期は日本でいう「盆と正月」に近いものがあるが、バカンスの期間は日本の比ではない。年の真ん中の６月～７月と年末年始の12月～１月に集中する。これは学校関係の休暇期間をベースに構築されているからだと考える。

そこで、私は友人や知人に次のようなインタビューを行った。質問は「あなたにとって旅（小旅行ではなく、長期の休暇においての旅）とは人生においてどのような意義があるのですか」というものだ。抽象的も甚だしいのだが、心優しいコロンビアの人たちは答えてくださった（ランダムに回答者Ａ、Ｂ…とする）。

・回答者Ａ（30歳女性）：「私にとって旅は、人生において、労働活動・知的活動に対して肉体と精神を休める働きがあると思います。また、旅の時間は自分自身の時間に費やすことができる、もしくは自分の周囲にいる大事な人たちとの繋がりや絆を強めるためのものです。一方では、旅先の文化や習慣などを自分たちの文化に照らし合わせながら、自分たちのモノ以上のことを学べる機会です。」

・回答者Ｂ（48歳女性）：「バカンスの旅というのは１年間働いたそのご褒美に値するお休みです。そして家族などの愛する人たちと共有するバカンスを過ごす、というのも大事なのです。」

・回答者Ｃ（21歳女性）：「私にとっては、（旅は）家族や愛する人たちが集まるためのものです。ほとんどの場合、バカンスの旅というのは家族やパートナーと行きます。コロンビアの人たちはバラバラには行動しません。また、旅は息抜きをするのに役にたち、それは日常のルーティン、仕事やその他の事から抜け出すことです。実際にはとても自由な感じです。」

また「人生の旅」、他国へ移住した方の捉え方は大変シビアである。

・回答者Ｄ（53歳女性）：「（今回の）私の旅行は人生をより良くするため、必然的なものだったのです。16年も勤めた会社から解雇されました。私は仕事の経験も学歴もありますが、52歳の身で仕事を失い、これからの人生をどうするか大変悩みました。スペインでの研究課程に応募していたので、査証の困難もありましたが、現在奨学金でスペインに滞在しています。帰国する意図は、今のところありません。私の人生が旅そのものです。」

バカンスの旅と少しずれるが、興味ある回答もあった。

・回答者Ｅ（30歳女性）：「多くの人は旅というと長距離だとか長期間の滞在を指しますが、１、２時間の距離、例えば隣町に行く、また日常の学校への行き帰りのバス移動も旅なんです。旅という言葉は、知っている場所や知らない場所にいくこと。そして、色々なことを観察したり、学んだり、味わったりする個人の経験を積むこと。見たことに考えさせられたり、反省したりという、毎回旅というのは異なるのが常なのです。それは毎日違った人に出会ったり、異なる現象に出くわしたりすることと同じでしょう。毎日お決まりのコースであっても、興味があります。」

以前ペルーで、旅行ガイドの人と話す機会があった。彼はペルー生まれの日系人だ。主に日本からの旅行者をガイドしている。「日本人はとにかく盛りだくさんのスケジュールを組まないと文句を言うのです。少しでも空き時間やゆったりした予定であるともう間が持たない。次から次へとプログラムがないと満足しないのです。間があると何をしていいかわからないのです。だから４泊５日の旅行日程でもギッチリとプランを詰め込みます」と、日本人グループのガイドでの苦労話をしてくれた。一方、ラテンアメリカでは、旅は特に予定を決めていない、文字通りの休暇に重点をおく人の方が主流である。

ここにラテンアメリカ式のバカンス旅行と日本式の観光旅行の違いがある。ゆっくりと家族の絆や夫婦・パートナーとの時間を共有する、日常から脱出するというのが主な目的であるラテンアメリカ。とにかく、時間の許す限り、知らないモノ・場所・食を求めるジャパン。それでも、回答者Ｄのように、学ぶ、観察する、経験するという人も存在している。「日常」と「非日常」を区別しているのではなく、日常の中の非日常を求めているのかもしれない。国民性・地域性の社会的パターンがあることを改めて感じた次第だ。

さて、天理教においての旅といえば、「おぢばがえり」[(1)]という聖地参拝がある。宗教的な目的（聖地や奇跡地の訪問）は巡礼とよばれるが、スペイン語話者の理解を得るには、「帰る」を「巡礼する」と言い換えれば理解が早くなる。この対比の詳細は井上昭洋氏の「おぢばがえりの巡礼論」[(2)]を参考にしていただき、「非日常」としてのおぢばがえりを捉えたい。

日本では、江戸時代にはお伊勢参りが旅の主流だったと聞く。「ご利益参り」という名目はあるにしろ、庶民は旅そのものを満喫するためであれば、関所を通ることや長距離を何日もかけて行き来することなど苦労ではなかったのに違いない。

天理教の「おぢばがえり」は信者にとっては「親」が住むところへの「里帰り」であり、それは自分の故郷、実家へ帰ることの喜び、楽しみなのであろう。コロナによる「封鎖」で著者自身が経験したが、海外からおぢばがえりは未だ「遠い」し「困難」もつきまとうぶん、おぢばに到着すると「感無量」なのだ。

［註］

（１）「ぢば」とは人間創造の場所であり、天理教信仰の中心であり、人類の親里である。その場所（天理教教会本部の神殿中央）に参拝することを、ぢばに帰るという。

（２）井上昭洋「おぢばがえりの巡礼論」、『グローカル天理』2011年12月号、参照。

# 麻疹をあなどるなかれ

天理参考館学芸員
幡鎌　真理 *Mari Hatakama*

「日本において５月は風薫る爽やかな季節である」という書き出しで、2018 年の同じ５月にここで「疱瘡神と赤」と題した小稿をあげた。まだ新型コロナウィルス感染症襲来以前のことで、1980 年５月８日に WHO が発表した地球上からの天然痘根絶宣言にちなんで疱瘡（天然痘）について書いたものである。まさか、その後あのようなパンデミックに世界中が襲われるとは知るよしもなかった。そして、その新型コロナウィルス感染症は落ち着きを見せ、昨年厚生労働省は感染症法の位置付けを５類感染症に下げた。その移行がなんと５月８日である。因縁を感じずにはいられない。同じ５類感染症に含まれるのが、最近流行が顕著な麻疹である。感染症とは、微生物や菌、ウィルスが体内に侵入し、感染して増殖を続け、ついには発症する疾患をさす。感染して病気を引き起こす生物を病原体と呼び、ウィルスは細菌より小さい。感染源となる病原体は自分では移動できないので、くしゃみの飛沫や飲食物など、必ず何かにくっついて人間の体内に侵入する。感染症の代表的な感染経路は、接触感染、飛沫感染、空気感染の３つとされる。頻度の高い感染経路は接触感染で、逆に低いのは空気感染らしい。手すり、スイッチなどの表面を介しての接触で簡単に病原体が付着する。特別なことをするよりも、手洗いが感染を防ぐのに有効な策であると喧伝されたのは道理に合っているのだ。満員電車で息をひそめるより、無防備にあたりを触らない方が得策なのかもしれない。

さて５類感染症の１つ、麻疹だが、「平成 19・20 年に 10 ～ 20 代を中心に大きな流行がみられたが、平成 20 年より５年間、中学１年相当、高校３年相当の年代に２回目の麻しんワクチン接種を受ける機会を設けたことなどで、平成 21 年以降 10 ～ 20 代の患者数は激減」したと厚生労働省のホームページに記載がある。また、「平成 27 年３月 27 日、WHO 西太平洋地域事務局により、日本が麻しんの排除状態にあることが認定され」ている。現在麻疹に罹患したら、それはほぼ海外由来の型らしい。しかし、決してあなどれない恐ろしい感染症であることに変わりはない。麻疹は天然痘より“軽い”ように思ってしまうが、感染力は天然痘より高く、ひとたび流行するとその地域の全住民が罹患する。肺炎などを併発して死亡率も高い。江戸時代に疱瘡は顔に瘢痕が残るため、「顔さだめ」とも呼ばれたが、麻疹の別名は「命さだめ」である。麻疹が死を連想させる病気だったことがうかがわれる。麻疹の起源は紀元前 3000 年頃にまでさかのぼり、メソポタミア地方が誕生の地とされる。７世紀のペルシアの医師ラーゼスは、麻疹は子どもが経験する自然現象と考えていたことが記録に残っている。14 世紀になると、明代の医学書『古今医鑑』に、はしかを意味する「麻疹」という言葉が登場した。日本では「はしか」と呼び慣わされ、赤斑瘡（あかもがさ）、稲目瘡（いなめがさ）とも言われた。平安時代の 10 世紀に麻疹は京で大流行する。現在放映中の大河ドラマ「光る君へ」の時代である。道長の娘、彰子が入内する一条天皇も発病し、「皮膚に赤い発疹が広がり」と記録が残っている。一条天皇はその３年前に流行した疱瘡にも罹患しており、病状が異なるのでそれぞれに罹ったことがわかるのである。疱瘡も麻疹も二度罹ることはない。その疱瘡が流行した時期に道長の長兄、道隆は亡くなった。道長は、兄たちがこのころ相次いで亡くなるのを目にして、200 年前の凶事、天平の疫病大流行で藤原四兄弟（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）が続けざまに疱瘡で命を落としたことを思い、恐怖したことだろう。明日は我が身か、と。幸いにもこのときは事なきを得て、五男坊で家督継承順位３番目にすぎなかった彼は、その後栄華を極めていくことになる。しかし、“禍福は糾える縄の如し”。30 年後の再びの麻疹大流行で、妊娠中から麻疹に罹っていた娘の嬉子が、後の後冷泉天皇を出産した２日後に亡くなってしまう。19 歳の娘を失った失意の道長はこの２年後に亡くなり、後冷泉天皇を最後に摂関政治も終わりを迎えるのである。表舞台から退き、藤原氏の“望月”も徐々に欠けていくことになる。江戸時代には 13 回もの麻疹の大流行があり、５代将軍徳川綱吉も成人で麻疹に罹患して亡くなったと言われている。

疱瘡も麻疹も予防法も治療法もよくわからず、貴族も将軍も命を奪われる恐ろしい病であったため、人々は神に祈りを捧げ、魔除けとして赤色の絵や人形を置いて回復を願うしかなかった。赤色の絵が疱瘡絵、はしか絵と呼ばれる赤一色で刷られた錦絵で、江戸時代後期に流行した。はしか絵では、疫病神を退治してくれそうな強い武人が勇ましく描かれていたり、麻疹を避けるまじない文がびっしりと記されていたりする。疱瘡絵もはしか絵もともに疫病除けだが、疱瘡絵は張り子などをモチーフに病気の「軽さ」を願うのに対し、はしか絵は疫病神を撃退する「攻撃性」が見られる。両者ともに症状が似ており、区別が付けがたい疫病であったが、人々の受け取り方がそれぞれで異なっていたのではないかと考えられる。その理由の１つが流行周期の違いである。疱瘡は周期が短く、江戸時代後期には常時蔓延していた。おそらく乳幼児の多くが罹り、生死の境を体験したことだろう。しかし、一度罹ると二度と脅かされることはない。すなわち、大人になって疱瘡に罹る人は少なかったのである。一方、麻疹は 20 年から 30 年と流行の周期が比較的長く、成人後も場合によっては罹患する恐れがあった。そのため撃退する意識が強く作用したと考えられる。はしか絵には、疱瘡絵のような愛らしい赤玩具は描かれない。

図１　引札　大阪　34.5 × 51.4㎝
これは「はしか絵」ではなく、商店の広告刷物の「引札」だが、ここに描かれる鍾馗も赤一色で描かれ、疫病神を投げ倒す強さを示している。〈天理参考館蔵品〉

麻疹ウィルスは冒頭に述べた通り、空気感染によって人から人に急速に感染する。感染が顕著な時期は、奇しくも春から夏にかけての気持ちの良いこの季節である。抗ウィルス薬はないので、現在もワクチン予防接種しか感染を防ぐ手立てがない。適切な方策でなんとか疫病の蔓延を防ぎたいものである。

# 2024 年度公開教学講座のご案内

## ― 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（10）―

2024 年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

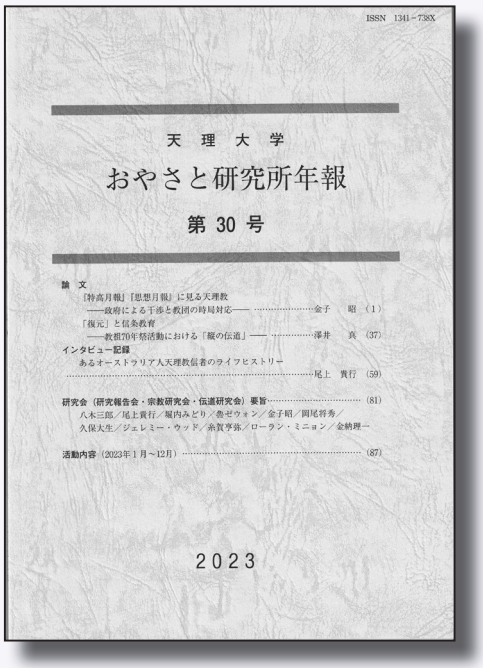
| | | |
|---|---|---|
| 第 1 回 6 月 | 井上昭洋所長 | 172 話「前生のさんげ」 |
| 第 2 回 7 月 | 澤井真研究員 | 114 話「よう苦労して来た」 |
| 第 3 回 9 月 | 岡田正彦研究員 | 135 話「皆丸い心で」 |
| 第 4 回 10 月 | 八木三郎研究員 | 36 話「定めた心」 |
| 第 5 回 11 月 | 森洋明研究員 | 85 話「子供には重荷」 |
| 第 6 回 1 月 | 中西光一研究員 | 144 話「天に届く理」 |

# 新　刊　紹　介

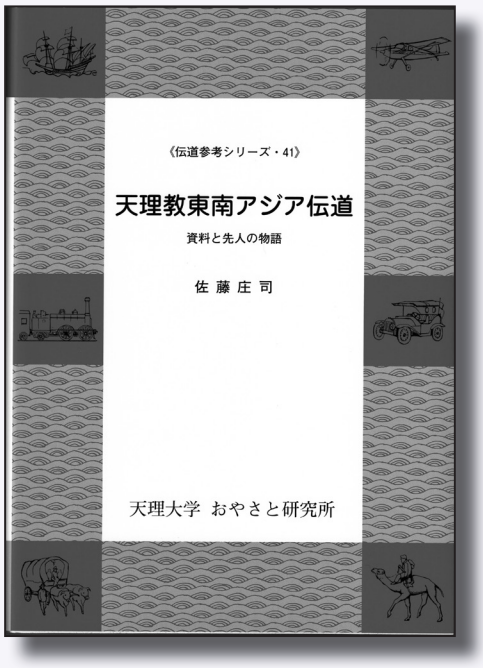
『おやさと研究所年報』第 30 号、『天理教東南アジア伝道　資料と先人の物語』（伝道参考シリーズ 41）を刊行しました。

内容の詳細に関しては研究所のホームページ（https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html）をご覧ください。

伝道参考シリーズは、道友社販売所で購入していただけます。『おやさと研究所年報』は、研究所ホームページよりご覧いただけます。




『おやさと研究所年報』第 30 号




『天理教東南アジア伝道　資料と先人の物語』

グローカル天理
第 25 巻　第 5 号　（通巻 293 号）
2024 年（令和 6 年）5 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　井上昭洋
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan